

ヨーゼフ・ツォーデラーと南チロル¹

ー多言語・多文化社会を描く文学ー

今井 敦

2002年の2月に、カール・ハンザー書店から、ヨーゼフ・ツォーデラーの最新作『慣れることの苦しみ』²が出版された。様々な新聞に掲載された書評を読んでもみると、ほとんどの書評が、この長編小説をツォーデラー文学の総まとめと見ている点で、一致している様である。フランクフルター・アルゲマイネ紙上でハインツ・ルートヴィヒ・アルノルトは、この作を、ツォーデラーの「最も野心的で、また最も良く出来た作」³と評価し、他の場所では、「彼の文学的、人間的経験の総まとめ」⁴と呼んでいる。新チューリヒ新聞ではベアトリーチェ・フォン・マットが、南ドイツ新聞でもハンス・ペーター・クニシュが、この作をツォーデラーの「総まとめ」として紹介している⁵。では、どんな意味でこれがツォーデラー文学の総まとめなのかといえ、その理由も、多くの書評で一致している様である。ヴェルト紙に書評を書いたウルリヒ・ヴァインツィアルは、ツォーデラーの文学を、「二つの文化・二つのメンタリティーの境界を越えようとする人の分裂性を、典型的な形で表現したもの」⁶と述べており、他の書評もツォーデラーのテーマを、多言語・多文化社会に生きる人間の「アイデンティティの探求」とか、「故郷の喪失」、「よそ者」意識、異文化世界への「旅立ち」、異なる文化に属する人々の葛藤、といった言葉で表現している。そして、こうしたツォーデラーのテキストの背景をなすものとして、彼の居住地である南チロルの現況が指摘され、新作『慣れることの苦しみ』は、これまで幾度か題材としてきた南チロルをもう一度取り上げて、ツォーデラーが自らの「南チロル小説」の総決算を試みたものだ、という訳である。以下では、こうしたツォーデラーのテーマと、彼の文学を理解する上で無視することのできない南チロルという地域との係わりを、南チロルを舞台にした三つの小説、『手を洗うときの幸福』⁷、『イタリア女』⁸、そして今回の『慣れることの苦しみ』を中心にして考察する。ただ、ツォーデラーのテキストを論ずる前に、少し長くなるが、まずは南チロルの歴史を概観し、作家の経歴を紹介しておきたい。

南チロルの歴史概観⁹

周知の様に南チロルは、第一次大戦まではチロルの一部であり、オーストリアに属していたが、1919年のサン・ジェルマン条約によって、イタリアに併合された。同じくイタリアに割譲された南隣のトレンティーノは、ハプスブルク時代からイタリア人が多数を占め、イタリア文化が支配的であった訳だが、南チロルの場合、23万5千人の住民の内92パーセントがドイツ語を、4パーセントがラディン語を母語とし、イタリア人は僅か3パーセントに過ぎなかった¹⁰。しかし、20年代にファシズムが台頭すると、ドイツ語の使用が禁止され、ムッソリーニからの全幅の信頼を得たエットーレ・トロメイの提唱に従って、南チロルの徹底的なイタリア化政策が始まった。ドイツ系住民は公職から追放され、地名はイタリア語へ変更され、ボーツェン近郊には大規模な工業地帯が建設されて、南イタリアから大勢のイタリア人労働者が入植した。住民は一時名前もイタリア語に変えるよう強いられたが、ドイツ語を守ろうとする人びとは密かに塾を組織してドイツ語教育を続けた。通称「カタコンベ学校」と呼ばれるこの塾を南チロル全域に組織したミヒャエル・ガンパーは、戦後、この地域の新聞・出版界を牛耳る大御所となる。

1939年には、ヒトラーのドイツとムッソリーニのイタリアが、南チロル人の国籍選択に関する協定を結んだ。この協定は、南チロルの人々に大変辛い選択を迫るものであった。ブレンナー以南に住むドイツ系住民は、年内に、ドイツ国籍とイタリア国籍のどちらかを選んで届け出るよう義務づけられ、ドイツを選んだ場合、ドイツ領内へ移住するよう定められたのである。つまり南チロルの人々は、自らの民族性を守る代わりに故郷を捨て、ドイツへ移住するか、あるいは故郷に残って完全にイタリア人として生きていくか、決めなければならなかった。1919年以前には、ブレンナーが何らかの政治的・文化的境界であったことなどなかったにも拘らず、ヒトラーは当初から、アドリア海へ注ぐ河の源まではイタリアである、というファシストの「自然」国境説を支持していた。国籍選択の結果、86パーセントの南チロル人がドイツ国籍を選び、その内の約7万人が、43年までに南チロルをあとにした。

戦後、多数のドイツ系、ラディン系南チロル人が、オーストリアとの再統一を求めて署名運動に参加したが、戦勝国外相会議は住民投票の実施を認めず、逆に、南チロルをイタリア領に留めおくことを決定した。この頃既に人口の約30パーセントがイタリア人となっており、ボーツェンでは住民の半数以上がイタリア人だった。

46年にオーストリアとイタリアの間で結ばれたパリ協定は、ヒトラー・ムッソリーニ協定の見直しや、ドイツ語とイタリア語の同格化、母語による教育、を約束し、ドイツ系住民の民族性保護を謳い、自治を認めるものだった。この協定に従い二年後には、国外に移住した南チロル人の帰郷が認められたが、しかし、そのほかの点でこの協定が実行されることはほとんどなく、南方からの入植政策は、ファシズム時代同様に続けられた。ボーツェン県（南チロル）は、イタリア人が多数を占めるトレント県と共に、一つの自治州に纏められてしまったため、自治などとは名ばかりのものであった。チロル人とイタリア人の間では諍いが絶えず、ファシズム時代の建造物や高圧送電塔を狙った爆破テロも始まった。こうした中で、帰属を決める住民投票の実施か、それが無理ならばパリ協定に従った真の自治権を与えるよう要求する南チロル人民党（Südtiroler Volkspartei）は、常に60パーセント以上、つまり大部分のドイツ系・ラディン系チロル人の支持を集めていた。57年に党首となり、60年以降長く県知事を務めることになるジルヴィウス・マニャーゴは、大規模なデモンストレーションに集まった民衆の前で、オーストリアと連携し、強い態度でイタリア政府に自治を要求することを宣言した。これを受けてオーストリアは、南チロル問題の存在自体を否定するイタリア政府を交渉の場につけるため、この問題を国連に訴える。二度の国連決議を受けたイタリアはようやく交渉に臨むようになり、長い綱引きの末、69年に、137項目からなる自治に関する「一括」措置案と「実行カレンダー」が合意された。これに従い、72年に新しい自治規約が制定され、多くの権限が順次、国や州からボーツェン県に移されて行った。そして、92年によりやうくオーストリアが、イタリアに対しての「紛争終結宣言」を出して、これを国連に通知するに至った訳である。

その後10年がたち、平和裏にドイツ系、ラディン系、イタリア系住民が共存しているかに見える南チロルだが、未だに紛争のなごりは残っており、とりわけイタリア系住民に不満が募っている。ドイツ系・ラディン系住民の圧倒的 support を誇る南チロル人民党も、イタリア系住民の不満の受け皿となることはできず、ネオ・ファシストの政党アレアンツァ・ナチオナーレが力をつける結果を招いている。南チロルでは、ドイツ系住民はイタリア語を、イタリア系住民はドイツ語を、それぞれ小学校の二年から学ぶことが義務づけられており、教師は勿論、郵便配達人であれバスの運転手であれ、およそ公的職業に就くためには、ドイツ語とイタリア語両方の語学試験に合格しなければならない。また、全公務員に占める各言語グループの割

合は、人口のそれに等しくならなければならないとされており、かつて公的職業のほとんどを独占していたイタリア系住民にとっては現在、逆にそうした仕事に着くことが非常に難しくなっている。それゆえ、現在の自治規約は自分たちにとって不利だ、と考えるイタリア系住民は少なくない様である。

民族間の紛争が依然として燻ぶっていることを示す良い例がある。2002年は、「紛争終結」から10周年の記念の年であったため、オーストリア国民議会にジルヴィウス・マニャーゴやクルト・ヴァルトハイムなど、南チロルの自治実現に携わった人々が招かれ、少数民族問題解決の理想的モデルとして南チロルの自治制度が讃えられた。ところがその秋、ボーツェンでは一つの住民投票が行われた。それは、ムッソリーニによって市内に建設された戦勝記念碑を巡る問題だった。この戦勝記念碑は、イタリアがオーストリアに勝利したことを記念して、1928年に建てられたものだが、ラテン語で、「ここから我々は他の人々に言語と法律と文化を伝えた」、という碑文が刻まれている。「他の人々」とは勿論、ドイツ系・ラディン系住民のことを意味しており、ファシズムによる抑圧の象徴としてこの記念碑は、ドイツ系・ラディン系住民にとって腹立たしい存在だった。ボーツェン市議会はこの記念碑の立つ広場の名前を、「戦勝広場」から「平和広場」へ変更することを決めていたが、これを阻もうとするアレアンツァ・ナチオナーレによって住民投票に持ち込まれ、イタリア系住民が現在70パーセントを越えるボーツェン市の市民は、「戦勝広場」の名前を残すことを選んだのである。

ヨーゼフ・ツォーデラーの経歴¹¹

作家ヨーゼフ・ツォーデラーは、こうした歴史を持つ南チロルに生まれ、現在もそこに住んでいるが、彼自身の生涯も、南チロルの歴史と同様、波瀾に富んだものである。ツォーデラーは、ファシズムによるイタリア化政策が進むさなかの1935年、チロルの古都メラーンで、貧しい労働者の子として生まれた。1939年の国籍選択の折、両親がドイツを選んだため、4歳の彼は一家ともどもグラーツに移住した。戦後ツォーデラーは、スイスのカトリック系寄宿学校に入るが、厳しい規律の支配するこの学校を退学して、肉屋の手伝いなどをしたあと、南チロルに帰っていた家族のもとに身を寄せた。つまり一家は、パリ協定に基づいてイタリア国籍を取得することができたのである。ヨーゼフの兄や姉は、かつてドイツ語が禁じら

れていた時代にイタリア語の学校に通ったため、イタリア語を使うことができたが、彼自身は当初、この言語を話すことはできなかった。その後、地元のギムナジウムを終えたあと、ヴィーン大学に入るが中退し、ヴィーンでフリー・ジャーナリストとして働きながら創作活動始める。この頃、同郷の詩人ノルベルト・C・カーザーは、南チロルの「有望な文学者」として、ヘルベルト・ローゼンドルファーと並んで、当時ほとんど無名であったツォーデラーの名前を挙げている¹²。70年にツォーデラーは、皿洗いなどしながらアメリカ、カナダ、メキシコを転々としたあと、南チロルへ帰り、そこで本格的に作家としての活動を始めた。しかし、この頃の南チロルの文化状況は、彼にとって決して恵まれたものではなかった。南チロル人民党の文化政策は、民族性を保持し育むことばかりに偏っていて、出版や批評においては、ほとんど党の機関紙と言っても過言ではない南チロル唯一のドイツ語日刊紙「ドロミーテン」と、その発行元であり、カトリック的保守的傾向の強い出版社アテージアの独壇場となっていた。なるほど戦前から戦後に掛けてアテージア社長を務めたミヒャエル・ガンパーは、反ファシズム運動の立役者であり、ドイツ語を守ったことに関して大きな功績があったが、ガンパー以後、この地域の言論・出版界はあまりに画一化されていた¹³。院外野党運動に加わり、南チロル人民党の政策を、民族対立を煽るものとして批判していたツォーデラーが、地元で作家として立つのは困難を極めた。こうした南チロルの「文学的静寂を、ティンパニーを打ち鳴らす如くに打ち破った」¹⁴、と評価されたツォーデラーの最初の詩集は、社会批判的内容を、南チロル方言を使って斬新に表現したものだが、その後、標準語で書いた詩集を二冊出版するのと平行して、76年に小説『手を洗うときの幸福』、82年に小説『イタリア女』を出したことにより、ドイツ語圏のみならずイタリアでも高い評価を受けた。続いて84年には『ロンターノ』¹⁵、87年に『持続的朝焼け』¹⁶、95年に『海亀祭』¹⁷という小説を発表して、今回の『慣れることの苦しみ』に至っている。

『手を洗うときの幸福』

『手を洗うときの幸福』では、スイスのカトリック系寄宿学校に入学した少年の心象風景が、一人称の語り手である少年自身の視点から語られる。国籍欄に記載のない身分証明書を持つこの少年、空襲の絶えないグラーツで幼年時代を過ごし、の

ちにイタリア国籍を得て両親の故郷南チロルに里帰りするこの主人公は、明らかにツォーデラー自身の少年時代に取材したものと言える¹⁸。この小説は、様々な土地を行き来する中で自分の属すべき場所を見失ってしまった少年の劣等コンプレックスが、絶対的従順を要求する寄宿学校の中で、次第に批判的な自我へと発展して行く過程を描いている。南チロルそのものは部分的にしか出て来ないものの、少年の心に映る過去や現在の風景を、幾重にも編み合わせて語ったこの小説は、39年の国籍選択によって故郷を捨てた一家族の運命と、根無し草となった少年の心の傷を、生々しく伝えている。自らの属すべき場所がない、と主人公が感じる理由の大きなものは、彼が話す言語である。グラーツではグラーツ方言を話し、寄宿学校ではスイス・ドイツ語に順応していく主人公だが、両親や兄弟と話す時にはもう一つのドイツ語、つまり南チロル方言を使っている。ところが、幼くして故郷を去った彼にとって、南チロルという土地そのものは、本当に存在するのかどうかすら定かでない、非現実的なものである。寄宿学校滞在中の彼の元に両親からイタリアの旅券が送られて来ると、彼は、自分の属す場所ができた事を喜ぶが、意味の解らぬ言語で綴られたその緑色の旅券を持って初めて南チロルに帰った時、イタリア語の話せない彼は、国境検問官にまともな返答すらできず、様々な場所でイタリア語が幅を利かせる故郷を目の当たりにして、自分はスイス人でもなければオーストリア人でもなく、また到底イタリア人ではありえない、と感ずることになる。しかし、故郷で休暇を過ごしたことを契機として、少年の心には自我が目覚め、カトリック系寄宿学校の具現する偏狭な世界観に疑問を抱いた彼は、学校を辞め、新しい世界を求めて旅立つことになる。

『イタリア女』

ヨーゼフ・ツォーデラーの名を一躍有名にしたのは、南チロルを正面から題材として取り上げた小説『イタリア女』である。三人称で語られたこの小説の主人公オルガは、南チロルの農村に流れてきた教師と村娘の間に生まれた子供であるが、母親と共に家を飛び出したあと、今はボーツェン市内の工業地帯でイタリア人ジルヴァーノと同棲している。父の死の知らせを受けて帰郷するオルガだが、同族意識が強く、異質のものに拒否反応を示す村人たちから見ると、彼女は裏切り者であり、「イタリア女」として罵るべき存在だった。オルガは、故郷の村ではもはやよそ者

であり、そうかと言って都市ボーツェンのイタリア人社会にも完全に溶け込んでい
るとは言えない。つまり、ここでも帰属性の喪失が問題となっている訳だが、しか
しオルガは、世界に出ることを望みつつも決してそれを実行することのなかった父
親とは異なり、イタリア人社会に飛び込んだことによって、自ら新しい世界を築こ
うとしている。村で行われた父の葬儀の日を、主人公オルガに非常に近い視点から、
様々なフラッシュバックを織り込んで語ったこの小説は、「農村対都市」というモ
ティーフ面から言えば、19世紀的「村物語」の幻想を破壊する反郷土小説である。
ここに描かれた村は、決して健康で調和的な懐かしい「故郷」ではなく、村人は、
無教養で酒癖の悪い、不寛容な人びとである。この小説は、イタリア国内の少数民
族として、ドイツ的民族性の保護を要求していた頃の南チロルのネガティブな側面、
すなわち、狭い地域に閉じ籠もり、近しい者ばかりでかたまった村社会の偏狭性を
暴き出している。

インゲボルク・バッハマン・コンクールでの朗読により注目を集めたこの小説は、
82年にハンザー書店から出版され、物語として高い評価を得ることになった¹⁹。
3年後には、ボーツェン在住のジャーナリスト、ウンベルト・ガンディーニによる
翻訳が、イタリア最大の出版社モンダドーリから出版された。これが版を重ねたた
め、ポケット版として同社の「世界文庫」シリーズに入り、さらに、廉価な「大ベ
ストセラー」シリーズに入った。その間イタリアの文学賞としては権威あるプレミ
オ・カトゥッロ・シルミオーネを授与され、ドイツ語圏とイタリアの双方において、
批評界でも売り上げの面でも大きな成功を納めた。しかしとりわけイタリアでこの
本が、多くの人々の目を南チロルの政治事情に向けたことは事実である²⁰。明らか
に告発的な調子を持つこの反郷土小説がイタリアでベストセラーとなって以降、ツ
ォーデラーはイタリアでは「イタリア人作家」と看做される一方、南チロルでは「自
分の出身地を汚す者」として拒絶されることになった²¹。この小説が映画化（86
年）された際、県知事マニャーゴも県議会で、「こうした映画は南チロルでは憤り
を生むだけだ」、と感想を述べている²²。しかしツォーデラーは、南チロル人民党や
日刊紙「ドロミーテン」の独裁支配とも言うべき状況の背景をなしている風土、つ
まり、異質なものの、オリジナルなものを理解しようとせず、多元的な社会を拒否し
ようとする農村風土を、折に触れ批判する²³。当時の南チロルの文化・教育担当官
はドイツ系住民とイタリア系住民について、「我々は、はっきり分離していればい
るほど、それだけよく理解し合うことができるのだ」²⁴と述べたことがあるが、ツ

ソーデラーは、あるインタビューの中で、ドイツ系、イタリア系、ラディン系の住民が共生し、相手によって臨機応変に一つの言語から他の言語へ、一方の世界から他方の世界へと頭を切り替えることが要求される南チロルの状況にこそむしろ大きなチャンスがあり、そうした多文化社会としての南チロルは、都市に匹敵する多様性を孕んでいるのだ、と述べている²⁵。小説『イタリア女』の主人公オルガは、そうした可能性に挑戦する人物として描かれていると言える。

物語作家としての試み

『イタリア女』の次に発表された小説『ロンターノ』では、再び自伝的色彩が濃くなっている。ヴィーンでフリー・ジャーナリストとして働く主人公は、仕事を辞め、伴侶であるメーナと別れて、死の床に就く母親を故郷メラーンの病院に見舞ったあと、自らの過去や人間関係のしがらみから遠く離れ、自由を得るためにアメリカへ旅立ち、ドライブ・インで働き、ヒッチハイクをしながら北米大陸を彷徨する。この『ロンターノ』以降、『持続的朝焼け』も、『海亀祭』も、疎外、旅立ち、自己探求、というソーデラー特有のテーマを扱っている点で初期作品と変わらないが、南チロルの社会的・政治的問題からは距離を置き、物語のための物語という傾向を強くしている。そこで語られるのは、主人公の自己省察であり、彼と周囲の人々との人間関係の綾であり、表現面では、陳腐な言い回しを避け、新しい言語を求める実験的色彩が強い。一度として抽象概念を用いた哲学的思弁に陥ることなく、主人公の内面に映る想念、表象、夢、風景、具体的出来事や会話を、時間的秩序を無視して、ペダンティックなまでに細かく、凝った文章で綴っていく。『ロンターノ』は『手を洗うときの幸福』を髣髴させる雰囲気を持った佳作だが、情熱の蘇生や旅先での運命的恋愛を描いた『持続的朝焼け』と『海亀祭』は、読者を疲れさせるほどに観察が細かく、言語は突飛で、内容は現実離れしている²⁶。

『慣れることの苦しみ』

『イタリア女』のあと、ソーデラーは長い間、南チロルを直接の題材にすることをしなかったが、今回発表された『慣れることの苦しみ』は、南チロルという多文化社会を舞台として、そこに生きる人々の人間関係をより複雑に描いた長編小説

である。そしてそこに描かれた人々の抱える問題は、『イタリア女』の時よりもむしろ深刻で、難しいものとなっている。主人公ユールは、ドイツ系の南チロル人で、地元の放送局のために記事を書くジャーナリストである。彼の妻マーラは、かつてファシスト党の幹部としてポーツェンに赴任したイタリア人の父親と、地元チロル人の間の娘であり、イタリア語、ドイツ語、チロル方言を使いこなす。自らの帰属性がはっきりしないのは、主人公ユールも同様である。39年の国籍選択の際ドイツを選んだ南チロル人の子として彼は、少年時代をグラーツで過ごし、スイスの寄宿学校に入り、学生時代はヴィーンに住んでいた。裕福な家庭環境に育ったマーラに対し、ユールの家庭は貧しく、イタリア嫌いだった筈の父親は、職を得るためやむなくファシストとなり、グラーツではナチ黨員となっていた。ユールとマーラの結婚生活は、一人娘のナターリエが事故死した時を境として、冷え切ったものとなって行く。数年後、娘を失った事実を依然として克服することのできないユールは、マーラを家においたまま、マーラの父親の故郷であるシチリアの町アグリジェントに旅立つ。そしてこの旅立ちから、この物語は始まる。

ツォーデラーのこれまでの小説同様、物語はもっぱら、アグリジェントに滞在する主人公ユールの視点から語られる。しかし物語の大半はユールの頭に去来する過去の出来事からなっており、ユールの旅は実は、ユール自身やマーラ、そして二人の家系の来し方を探求する過去への旅ともなっている。義理の父デ・パスカの出身地であり、未だファシズムが信奉される海辺の町アグリジェントを歩きながら、ユールの頭には、アルプスに囲まれた南チロルでのマーラや娘ナターリエとの生活が去来する。結婚生活での出来事や、イタリア系、ドイツ系双方の入り混じった親戚や友人たちとの交わりが反芻され、同時に南チロルを巡る過去の様々な事件も回想される。ユールの回想を通してこの小説には、重い過去からまだ完全には抜け切れていない南チロルという多文化社会の様々な側面が、パノラマの様に提示される。

アグリジェントのまちを彷徨いながら、ユールが自問するのは、何故マーラとの関係が冷え切ってしまったのか、自分は彼女に何を求めていたのか、ということである。ユールとマーラは、68年運動を通じて知り合うが、知り合ったばかりの頃のマーラはユールにとって、よその国から来た人であり、その異国性こそが、彼を惹きつけたものだった。それゆえ彼は、当初マーラと話す際はイタリア語しか使わなかった。ドイツ系南チロル人を母親に持つマーラ自身も、南チロルで生まれ育ちながら、死んだ父親の世界から離れようとせず、イタリア人として振舞っていた。

ユール本人はといえば、イタリアの国籍を持っているにも拘らず、オーストリア人としての自覚を失うことがない。結婚生活に慣れるに従って次第にユールは、義父がファシスト党の幹部であったという事実や、死んだその父親の世界にしがみついている妻に苦痛を感じるようになっていく。

この苦痛は、歳を取ったユールの中に様々な疑念を生み出す。それは、娘が事故死した時妻は、昔のイタリア人の恋人と会っていたのではないか、彼女は自分よりもそのイタリア人と一緒の方が幸せだったのではないか、という夫婦間の疑念に留まらず、ファシストとして南チロルに送り込まれて来たイタリア人全体に対する疑念へと膨らんで行く。ボーツェンに立つファシズム時代の戦勝記念碑に話が及ぶや否や、親戚同士の集まりも緊迫したものとなる。チロル人としての民族性を誇示して「故郷防衛者」を気取る人びとに普段は肩を竦めるばかりであったユールも、突如としてその「故郷防衛者」の肩を持ち、戦勝記念碑の取り壊しを叫ばずにはいられない。そうした時ユールは、友人や親戚の間にも、目に見えない深い溝が走っていることを感じる。結局のところイタリア人は客としてここにいるに過ぎず、自分達こそがこの土地の所有者なのだ、という若い時分には考えもしなかった硬直した観念に囚われたユールは、この地に生まれ育ったマーラとその家族の前で排他的感情を爆発させ、自分の内にファシストを見出して愕然とする²⁷。

ドイツ系の夫とイタリア系の妻の冷え切った結婚生活を描いているこの小説は、異なる文化に属する人間が理解し合うことの不可能を表現している様に読めてしまうかもしれない。しかし、ツォーデラーの意図はそういうところにはない、と私は考える。でなければ、主人公がアグリジェントに旅立つ意味がないからである。悪性の脳腫瘍に侵されたユールは、妻を家に残したまま義父の故郷へと最後の旅に出るのだが、それはむしろ、妻や義父の過去に知り合うための旅であり、ユール自身の言葉で言えば、「マーラのもう一つの故郷に行って、この世から消え去る」²⁸ための旅だった。ユールはこの旅を通じて、ファシストであった義父デ・パスカを理解しようとする。海辺に生まれ育ちながら、周囲は敵ばかりといってもよいアルプス地方に派遣され、その地で愛のない妻と結婚して家庭を築き、一度として故郷に帰ることのなかったデ・パスカ。その人生を追体験することによってユールは、妻の世界を理解しようと努めているのである。

この小説では、ユールとマーラによって象徴される二つの社会が理解し合うというところには至らない訳だが、それは、現在の南チロルの状況をそのまま反映して

いる、と考えられる。しかし、主人公ユールは、均質な世界に閉じ籠もり、ほかの世界を理解する努力を放擲してしまう人間ではない。死を前にして、アグリジェントという異質の世界に旅立つ主人公の姿は、ツォーデラーのこれまでの文学に描かれた、新しい世界、新しいアイディンティティを求めて出発する主人公に似ている。一方でまた、自らの過去を執拗に掘り返していく主人公の姿も、ツォーデラーのテクストに共通するものである。それは、39年の国籍選択ゆえに幼くして故郷を離れた作家自身が、自分の人生を繰り返し反芻する姿とも重なり、また、同世代の多くの南チロル人を代表している、とも言えるだろう。

ヨーゼフ・ツォーデラーは、『手を洗うときの幸福』から『イタリア女』を経て『慣れることの苦しみ』に至る彼の南チロル小説を通じて、歴史を背景にしながら、南チロルという多文化社会を、文学という形で映し出そうとしたと考えられる。ツォーデラーの三つの南チロル小説は、南チロルの現代史を詳細に記述する専門書よりも、遥かに生き生きとした形で、そこに住む人間の姿を伝えることに成功している。南チロルの運命を自ら体現しているとも言える作家ツォーデラーの意図も、正にそうしたところにあっただと思われる。

注

本稿は日本独文学会2003年度春季研究発表会における口頭発表「引き裂かれた故郷—Joseph Zoderer と南チロル」（6月1日）を基にして、これに加筆したものである。

¹ Tirol という地名は、原語に近い表記をとるならば、「ティロール」とすべきであるが、日本語では「チロル」が一般化しているので拙論でも後者を使った。

² Joseph Zoderer: *Der Schmerz der Gewöhnung. Roman*. München/Wien (Hanser) 2002.

³ Heinz Ludwig Arnold: *Mara und ihre Brüder*. In: FAZ, 23.9.2002.

⁴ Heinz Ludwig Arnold über „Der Schmerz der Gewöhnung“ von Joseph Zoderer. Die sieben Göttinger Literaturtipps der Text+Kritik-Redaktion [Veröffentlichung im Internet], September 2002.

⁵ Beatrice von Matt: *Der Fremdheit habhaft werden*. In: NZZ, 2.3.2002; Hans Peter Kunisch: *Das Echo Rudi Dutschkes in Südtirol*. In: Süddeutsche Zeitung, 1.7.2002.

⁶ Ulrich Weinzierl: *Ein Hund weit weg in den Bergen. In Italien gilt er als „scrittore italiano di lingua tedesca“*. In: Die Welt, 2.3.2002.

⁷ Joseph Zoderer: *Das Glück beim Händewaschen. Roman*. München (Relief) 1976.

⁸ Joseph Zoderer: *Die Walsche. Roman*. München/Wien (Hanser) 1982.

⁹ 南チロル史の概略を述べるにあたって以下の5つの文献を主な下敷きとした。1) Wolfgang Pfaundler: *Tirol in Vergangenheit und Gegenwart*. Innsbruck (Inn) 1989; 2) Rolf Steininger: *Südtirol*

1918-1999. Innsbruck/Wien (Studien) 1999; 3) Michael Forcher: *Tirols Geschichte in Wort und Bild*. Innsbruck (Haymon) 2000; 4) Alfons Gruber: *Geschichte Südtirols. Streifzüge durch das 20. Jahrhundert*. Bozen (Athesia) 2000; 5) *Südtirol-Handbuch*. Hrsg. von der Südtiroler Landesregierung. 20. überarbeitete Auflage, Bozen 2001.

- ¹⁰ Michael Forcherによれば、„Südtirol“という呼称自体、19世紀まではむしろ今日のトレンティーノについて使われたもので、„Welschtirol“と同義語であったという。現在の„Nordtirol“、„Osttirol“、„Südtirol“は区別なく一括して„Tirol“と呼ばれていた訳で、現在の呼び方が一般化したのは1919年以後である。尚、„Tirol“という地名自体は、13世紀にこの地域を統一した von Tirol 伯に由来する。Von Tirol 伯の居城はメラーン近郊に今も残る Schloß Tirol であった。Vgl. Michael Forcher: *Tirols Geschichte in Wort und Bild*. a.a.O., S.9 sowie S.88ff.
- ¹¹ ツォーデラーの経歴を纏めるにあたって参考にした主な文献は以下の4つである。1) Hans-Georg Grüning: *Die zeitgenössische Literatur Südtirols. Probleme, Profile, Texte*. Ancona (Edizioni Nuove Ricerche) 1992; 2) Joseph Zoderer: *Wir gingen*. In: *Die Option. 1939 stimmten 86% der Südtiroler für das Aufgeben ihrer Heimat. Warum? Ein Lehrstück in Zeitgeschichte*. Hrsg. von Reinhold Messner. Aktualisierte Neuauflage. München/Zürich (Piper) 1995; 3) Johann Holzner (Hrsg.): *Literatur in Südtirol*. Innsbruck/Wien (Studien) 1997; 4) Christoph König: *Joseph Zoderer*. In: *Kritisches Lexikon zur deutschsprachigen Gegenwartsliteratur*. Hrsg. von Heinz Ludwig Arnold. München o.J. [Stand: Juni 2001].
- ¹² Vgl. Hans-Georg Grüning: *Die zeitgenössische Literatur Südtirols*. a.a.O., S.84 sowie Walter Methlagl: *Wie die Kunst von Kunst kommt. Über Joseph Zoderers Frühe Arbeiten*. In: *Literatur in Südtirol*. Hrsg. von Johann Holzner. a.a.O., S. 49.
- ¹³ Vgl. Johann Holzner: *Literatur in Tirol (von 1900 bis zur Gegenwart)*. In: *Handbuch zur neueren Geschichte Tirols*. Bd. 2: Zeitgeschichte. Hrsg. von Anton Pelinka und Andreas Maislinger. 2. Teil: Wirtschaft und Kultur. Innsbruck (Wagner) 1993, S.209-269, hier besonders S.244f. und S.253ff.
- ¹⁴ Gerhard Riedmann: „Boofn tu i vor Wuat“. *Dialektlyrik aus Südtirol*. In: *Tiroler Tageszeitung*, 11.12.1974, zitiert nach: Joseph Zoderer: *s maul auf der erd oder dreckknuidelen kliabn*. Mit Zeichnungen von Luis Stefan Stecher. Bozen (Raetia) 2001 [Originalausgabe: München (Relief) 1974], S.105.
- ¹⁵ Joseph Zoderer: *Lontano. Roman*. München/Wien (Hanser) 1984.
- ¹⁶ Joseph Zoderer: *Dauerhaftes Morgenrot. Roman*. München/Wien (Hanser) 1987.
- ¹⁷ Joseph Zoderer: *Das Schildkrötenfest. Roman*. München/Wien (Hanser) 1995.
- ¹⁸ どの程度この小説が作者の幼少年時代に取材したものなのか、伝記研究のない状況では厳密なことは言えないが、ツォーデラーが自らの過去を語った以下の二つのエッセイを読むだけで、この小説の多くの部分との共通性は明らかである。Vgl. Joseph Zoderer: *Wir gingen*. a.a.O. S.195-212 sowie Joseph Zoderer: *À propos Heimat*. In: *Literatur in Südtirol*. Hrsg. von Johann Holzner. a.a.O., S.13-19.
- ¹⁹ Vgl. Christoph König: *Joseph Zoderer*. In: *Kritisches Lexikon zur deutschsprachigen Gegenwartsliteratur*. a.a.O., S.7.
- ²⁰ ツォーデラーのテキストのイタリアにおける受容に関しては、次の文献が詳しい。Vgl. Luigi Reitanni: „Lontano“. *Der „Italienkomplex“ in der deutschsprachigen Literatur aus Südtirol*. In: *Literatur in Südtirol*. Hrsg. von Johann Holzner. a.a.O., S.54-76, hier S.58ff. ツォーデラーは、著書のほとんどがイタリア語に翻訳された唯一の南チロルの作家である。

-
- ²¹ Vgl. Andreas Reiter: *Südtirol*. In: Literatur und Kritik, H.285/286, Juni 1994, S.48-52, hier S.52 sowie Hans-Georg Grüning: *Die zeitgenössische Literatur Südtirols*. a.a.O., S.89.
- ²² Georg Engel: *Literatur und Politik in Südtirol. Am Beispiel der Zeitschrift „sturzfälle“*. In: Literatur und Kritik, H.285/286, Juni 1994, S.59-64, hier S.60.
- ²³ Vgl. z.B. Gerhard Mumelter: *Südtirol – 11 Ansichten*. In: Drehpunkt, 12 (1980), Nr. 48/49, S.100.
- ²⁴ Ebenda, S.98.
- ²⁵ Vgl. Anna Rottensteiner / Christine Riccabona: *Von der Ambivalenz einer Sehnsucht. Interview mit Joseph Zoderer am 7.3.2002, anlässlich der Buchpräsentation seines neuen Romans „Der Schmerz der Gewöhnung“ (Hanser 2002) im Literaturhaus am Inn*. Literaturhaus am Inn [Veröffentlichung im Internet] April 2002.
- ²⁶ Gerhard Riedmann はこうした傾向を、ツォーデラーの「とどまることのないドイツ語からの別れ」と呼んで批判している。Riedmann の批判は、むしろ彼自身の立場の保守性を露わにしているが、『持続的朝焼け』に關しての言語批判には頷けるところもある。 Vgl. Gerhard Riedmann: *Joseph Zoderer oder der unaufhaltsame Abschied von der (deutschen) Sprache*. In: Sprachkunst. Beiträge zur Literaturwissenschaft, 21 (1990), S.313-324, hier besonders S.320ff.
- ²⁷ Vgl. Joseph Zoderer: *Der Schmerz der Gewöhnung. Roman*. a.a.O., S.173ff.
- ²⁸ Ebenda, S.285.